

図書館通信

第3号
R02.10.22
美和高校
図書部

読書の秋！ 秋の夜長に読書してみませんか？

企画展「こんな時だから 旅♪」



お出かけにはぴったりの季節ですが、今年はなかなか旅行に出かけるタイミングがありませんね。そこで、こんなときだからこそ、本を読んで架空の旅行をしてみませんか？世界の絶景から、『オリエント急行殺人事件』の舞台に、京都の名所・地元愛知県の魅力的なスポットまで、3年図書委員のオススメ旅を紹介しています！

また、3年担当の先生方による「旅アンケート」の結果も紹介されています。ベトナムのバイナムーって、どんな食べ物？ドイツでパスポート紛失の危機に陥りかけたのは、どなた？普段はわからない先生の様子が見えてくるかもしれません。

図書館に入ってすぐの窓側に展示してあります。資料などは、ぜひ手にとってじっくり見てみてくださいね。（ただし、ペーパークラフトにはお手を触れないようにお願いします）

文化祭での図書館

文化祭のとき、図書館に来てくれましたか？

3年生図書委員作成の「旅」展示や「雑誌バックナンバー譲渡会」を行いました。本校の雑誌譲渡のリユース活動は、平成27年から実施されている企画です。29名の応募があり、109冊が配布されました。『オレンジ・ページ』が大人気で、『ダ・ヴィンチ』『Number』と続いています。来年は、是非あなたも応募してみてください。

(折角応募してくれたのに、行き先不明の雑誌が1冊残されています。心当たりのある人は、図書室まで申し出てください！)



「ミニ・コーナー」紹介

図書館内に「美術館へ行くコーナー」・「コロナウィルスについて知ろうコーナー」を設けています。本は、いつでも皆さんを待っています。図書室に足を運び、本を手に取り、ページを開いてみてください。



読書感想文コンクール結果

今年も1・2年生の皆さんに読書感想文に取り組んでもらいました。普段、本と縁遠い人も、自分自身で一冊を手に取りページを開くという「本との出会い」の瞬間を経験できたと思います。ステキな本と出会えましたか。

最優秀賞作品は「第66回青少年読書感想文全国コンクール」に応募しました。裏面に全文を掲載しましたので、読んでみてください。

最優秀	1年生	「命の大切さ」(「君の臓腑を食べたい」)
優秀	1年生	「また、同じ夢を見ていた」
	2年生	「ぼくは満員電車で原爆を浴びた」



読書感想文最優秀作品 「命の大切さ」

私は、膵臓がなんのためにあるのか知らなかったし、考えたこともなかった。膵臓とは、すい液をつくって十二指腸に送り出したり、インスリンというホルモンをつくっているもの。この臓器がなくなれば、人はエネルギーを得られなくなり、死んでしまうそう。こんなにも重要な役割を果たしているのに、私はそのことについて知らなかった。膵臓を知るために興味本位で読んだこの本に、生きると伝えることについて学ばされた。

主人公春樹のクラスメイト桜良は、膵臓の病気余命一年と告げられていた。親友やクラスメイトには病気のことを伝えず、家族と春樹だけに伝えていた。そのため『共病文庫』という日々の想いを書いたものをつけていた。それは死ぬまで誰にも見せないと決めていたが春樹に見つかり、彼だけに想いを語る。桜良は余命一年よりも前に、通り魔事件に巻き込まれて亡くなってしまう。



今から十年以上前のことだ。小さかった頃、私は体が弱く、風邪をひいたり、入院したりしていた。少し暑くなり始めた日、みんなは半袖を着ていた。だけど「風邪ひくから。」と私は本格的な夏が来るまで薄い長袖のを着させられていた。半袖の方がかっこいいと思っていたので、みんながうらやましかった。命に関わる病気ではなかったものの、いつまで続くのかなと思っていた。楽しみにしていた保育園から行く遠足も行けなくなった。たくさんの人が心配してくれて、お見舞いに来てくれた。

桜良は膵臓の病気にかかっていることを分かっているのに、落ち込むことなく元気でポジティブだった。『共病文庫』という本音を書ける場所、春樹という自分のことを知ってくれた人がいたから、誰にも伝えずにいられたと思う。その心の強さを尊敬した。その点、私はいつまた襲ってくるか分からない病気に対して憎く思っていた。保育園の先生や友達からも心配されていた。いくら小学生以下の子供だったとはいえ、もう少し明るく、笑顔でいられたらよかったなと思う。そう思うのは、桜良みたいに重い病気でも楽しくしている人がいると分かった今だからだ。だけど、心配されるのはうれしかった。たくさんの人が私を元気づけてくれた。おかげで今は、体も強くなり、風邪をひきにくくなった。いろいろなことをしてくれた家族にもありがたみを感じる。



私は小さい頃、病気やケガは治療をすれば治るものだと思っていた。しかし、現実とは違った。治療がまだ開発されていなかったり、手当てが遅かったりしたら治らない。桜良だって臓器の病気は完全に治りそうにはなかった。どうして一人一つの命しかないのだろうか。そう考えると生きていることにとっても重みを感じる。

またこの本を読んで、人に伝えることの大切さを教えられた。今年は感染症が世界各地で流行した。私が好きだった著名人も感染し、亡くなってしまった。数日前まで元気にしていて、みんなを笑わせる姿をテレビで見ている。本当に急だったので、信じられなかった。多くの人が感謝の気持ちを直接伝えられないまま、その人は去ってしまった。桜良も通り魔に一瞬にして命を奪われた。もう二度と戻らない「命」が消えてしまった。

明日はあると生きているのは大間違いだと思う。桜良の言った「もしかしたら明日死ぬかもしれないのさ。」という言葉に胸を打たれた。桜良は死ぬまでにやりたいことを少しずつやっていた。伝えたいことを『共病文庫』に書いていた。あと一年しかないと分かっていたから行動できていた。でも現実では何も伝えることができず、急に亡くなってしまった人の方が多い。これからもそういう人が出てくると思う。もちろん自分を含む世界の人々が。伝えることは難しいことかもしれないけれど、「ありがとう」や「ごめん」、「大好き」と伝えたい言葉があれば素直になって伝えたいと思う。

この本は人生について、人間関係について考えさせられる素晴らしいものだと思う。自分はいつ死ぬのか、誰に質問しても正確に答えられる人なんていない。生き方はそれぞれ違うが、私は一日一日を大切に過ごしたい。今まで私を支えてくれた人達に少しずつ恩返しをしたい。一日の価値は皆違う。つらいこともあれば、楽しいこともある。だけど、一日二十四時間ということは皆同じだ。通り魔事件によって桜良の一生は一瞬にして奪われた。とても残酷なことだと思う。でも、私は生き方について考えさせられた。毎日「生と死」について考えるのはそれはそれで息苦しい。しかし、時間のあるときには向き合いたい。たった一度の人生だから大切に守っていききたい。

